

## 第4回 社会教育委員会議 議事概要

### 1 議事

#### (1) 報告事項

ア 令和7年度教育費予算について

イ 令和6年度野外教育総合推進事業実施報告について

ウ 地域学校協働活動推進事業令和6年度実施報告及び令和7年度実施方針案について

#### (2) 協議事項

今年度テーマ「地域学校協働活動を通じた地域づくり」について

#### (3) 連絡事項

### 2 日時

令和7年(2025年)3月14日(金)10時00分～12時00分

### 3 場所

STV北2条ビル6階 AB会議室

### 4 出席者

#### (1) 委員(出席8名)

出口議長、片岡副議長、小野寺委員、松岡委員、  
今泉委員、安田委員、臼井委員、榊委員

#### (2) 事務局(11名)

井上生涯学習部長、大瀬生涯学習推進課長、  
釜石社会教育担当係長、大久保野外教育担当係長、国奥職員、三井職員、  
鵜沼職員、中原職員、大山職員、野上職員、橋本職員

### 5 開催形態

公開(マスコミ関係者:北海道通信社1名)

### 6 会議内容

【配布資料】

資料1：令和6年度第4回社会教育委員会議 次第

資料2：座席表

資料3：局別施策の概要

資料4：社会教育関係団体への補助金の交付について

資料5：令和6年度野外教育総合推進事業実施報告について

資料6：地域学校協働活動推進事業令和6年度実施状況及び令和7年度実施方針案について

資料7：札幌市社会教育委員会議報告書（令和6年度）案

(1) 出口議長挨拶

(2) 報告事項

① 令和7年度教育費予算について

ア 事務局より、資料3及び4を用いて説明。

イ 主な質疑応答

・「こども本の森」について、現段階において具体的にどんな内容か確認したい。（出口議長）

→令和8年夏の開設を目指して、建築家の安藤忠雄氏の事務所が設計をするということで、寄付の話をいただいた。先行しているのは大阪市、神戸市などであり、一番新しいところでは熊本市に同様の事例を確認している。場所は北大の中でも一番札幌駅に近い、クラーク会館のすぐそばに建築を予定しているところ。場所は北大が提供し、建物は安藤忠雄氏が寄贈、建物の維持管理は北大が行い、ソフト面となる、図書館の運営については札幌市教育委員会・図書館が運用を担い、専門の司書を配置する予定。先行している他の自治体に倣い、可能な限り寄付による運営を目指す方向で進めている。（井上部長）

・「不登校児童生徒のための新たな学びの場整備費」について、具体的に教えていただきたい。（今泉委員）

→「ちえりあ」にある教育支援センターを始め、市内ほか5カ所にある教育支援センターに係る運営費が含まれており、加えて、今年度から開始したメタバースの使用による不登校児童への支援に係る体制の拡大等について必要なお金を計上している。（井上部長）

② 令和6年度野外教育総合推進事業実施報告について

ア 事務局より、資料5を用いて説明。

イ 主な質疑応答

・今年度は教育支援センター宮の沢及び白石に通所している児童生徒が対象であり、来年度の予算が今年度と同額というところであるが、事業規模を広げていく方針はあるか。（小野寺委員）

→予算規模に変化はないものの、来年度は他の教育支援センターでも実施できないか検討している。（大久保係長）

・自然体験活動リーダー養成について、申込は10人であったが、予定していた人数は何人か。申込者は児童会館や小学校などで仕事をされている方が多い印象を受けたが、純粹に地域の活動をしている方はいたのか。（臼井委員）

→募集の定員は20名であったため、今回はその半数だったということになる。申込者の内、地域での活動をされていた方としては、自然体験を行う団体に所属しており、子ども向けのアウトドアイベントにて指導者を務める方が、自身のスキルをより高めたいということで1名参加していた。定員はまだ満たないため、次年度以降はチラシの配り先、実際に出向いて募集をかけるなど、どのように色々な対象へ働きかけるかを考えていきたい。また、事業のターゲット層として大学生を想定していたものの、今回申込はなかったため、こちらも申込の時期等合わせて検討していきたい。（大久保係長）

・教育支援センター宮の沢と白石に通所している人数を教えてください。（安田委員）

→宮の沢が約30～40名。全員が同時に来るということはなく、曜日ごとに来る場合もあり、基本的に自由とされているが、常に10人以上はいるイメージである。白石については約20～30名。概ね10人以下で活動している印象。（大久保係長）

→関連して、この活動が不登校の解消につながったということはまだ確認されていないのか。（出口議長）

→日帰りで2時間程度のプログラムであるため、この活動がどこまで不登校の解消につながったかというところまでは見えていないが、アンケートの結果の箇所で示したとおり、「もっと仲間と活動したい」

「もっといろいろなことにチャレンジしたい」という項目に対し、「とても思う」「まあまあ思う」との回答も見受けられるので、地域での自然に触れる遊びや、ちょっと外に出てみよう、ちょっと仲間と関わってみようというところに広がっていくきっかけとなれるよう考えている。（大久保係長）

・今年度から始まったチャレンジ自然体験はぜひ続けてやってほしい。不登校の解消等の結果にはすぐに結びつかずとも、こういった体験活動を求める児童生徒はたくさんいると考えられるため、機会を増やすことで、そういった子どもたちが参加できるよう継続して行ってほしい。それから自然体験活動リーダー養成について、60代以上の方が0人となっているが、こういう方々がチャレンジ自然体験や林間学校のような機会に入っていく可能性があると思う。自然体験活動リーダー養成という事業のPRがなかなか届きづらかったのではないかという気がした。（松岡委員）

→仰っているとおり、どこへPRするかというところはもう少し検討していきたい。（大久保係長）

・自然体験活動リーダー養成について、大学生をターゲット層としているとのことであり、現状の日程では大学の授業と重複していないため、大学の日程を考慮したスケジュールということであったのか。大学生へのアプローチとしては、ゼミの先生に個別に伝え広める方法もあると考えている。また、5回目の2月22日の「みんなの雪だるまをつくろう」のところで、子どもが参加しているが、どのように募集をかけたのか。（榊委員）

→自然体験活動リーダー養成の日程等の構成については、いただいた意見を基に考えていきたい。大学の授業日程の考慮について、今回は夜や土日の開催により構成したところ。5回目の「みんなの雪だるまをつくろう」講座は、さっぽろ青少年女性活動協会が元々滝野自然学園で開催している「森のがっこう」というイベントの一部のプログラム実施・運営をリーダー養成講座の受講生の方に任せていただいたもの。そのため、元々自然学園のイベントに申し込んでいた小学生の子どもたちが来ていた状況。（大久保係長）

・今の大学に対する内容について、チラシをいただければ大学生に拡

散する。プリントでもデータでも問題ない。また、仮に自然体験活動リーダー養成参加者に大学生が増えたとして、チャレンジ自然体験に参加する子どもたちと触れ合うといったことも効果的だと思う。この二事業が一緒になるようなコラボレーションができるとより良い。あるいはコミュニティ・スクールと関連付け、学校の課題として取り組むこともできるのではないかと考えられるため、推進していくことで次に道が開けていくと思う。（片岡副議長）

→ぜひチラシの件はお願いしたい。大学生との連携について、やはり児童らと年が近いことによる利点はあると考えられる。そのため、大学生がチャレンジ自然体験活動にどう参加していくのか、連携する可能性等について検討したい。教育支援センターとの調整も進めていきたい。（大久保係長）

③ 地域学校協働活動推進事業令和6年度実施報告及び令和7年度実施方針案について

ア 事務局より、資料6を用いて説明。

イ 主な質疑応答

・コミュニティ・スクールという考えが打ち出されてから長く経ち、「地域にある学校」という考えが学校現場でも少しずつ理解されてきているが、一方で業務量の問題から目が向かない人も増えていると思う。その中で校長先生を始めとする管理職や市教委が、地域学校協働活動のような政策を打つことにより関心が高まることはあると思う。これまでの現状において、こういった活動や考えを啓蒙しようと努めている方々はあるだろうか。もしいるようであれば、自身もそれを少しか応援する形で何かできればと考えている。（片岡副議長）

→実際に活動を導入してみて、地域の方と触れていく中で「これ、いいもんだな」と感じ、言葉を伝えてくれる校長先生や、校長会支部の研修会でPRしてくださる校長先生もいらっしゃる。また、コミュニティ・スクールを導入し1年間の活動を通じて学校運営協議会で地域の方や推進員と関わっていく中で、1回目と比べて最終回の発言が変わっていき、それを校長先生同士の研修会、市教委と学校教職員の研修会のような場で自分の言葉で語ってくれる先生が増えてきているよう

に感じている。（釜石係長）

・白石区と豊平区の事業実施校がかなり少ないが、何か要因はあるのか。（安田委員）

→今現在事業を実施している学校は元々地域との関係ができていた学校だと考えている。他校が地域と全く関わりをもっていないということではないが、事業を実施する段階にまでは至っていないということかもしれない。来年度コミュニティ・スクールを導入する学校で、白石区は2つのパートナー校区、豊平区は3つのパートナー校区が新たに導入を予定している。コミュニティ・スクールを導入したところというのは、ある程度学校と地域の関係が構築されつつあるものと理解しているため、そういったポイントを中心に事業周知等後押ししていきたいと考えている。（釜石係長）

・来年度の予算は95校ということで倍増計画となっているが、見通しはどうか。（出口議長）

→現在の事業実施校は48校あり、その中には今年度のコミュニティ・スクール導入校の半数が含まれている。来年度はコミュニティ・スクールの導入を新たに90校で予定しているため、そのうちの半数に地域学校協働活動を導入してもらえることを目標にしている。ただ、無理強いをするものではないと考えており、やりたいと希望するところが予算上の都合で実施できないということにならないよう予算を確保したところ。（釜石係長）

・学校の先生が地域に溶け込んで、その地域の人であると認知してもらうことが理想だと思う。もちろん学校には沢山のやるべきことがあるが、基本的には人としてその地域に属しているという捉え方もできる。教員が社会教育の文脈で地域へ溶け込むとどういうコラボレーションがあるのか、という部分については何かできることがあれば言ってほしい。（片岡副議長）

### （3）協議事項：今年度テーマ「地域学校協働活動を通じた地域づくり」について

今年度の協議テーマについては、今回の会議をもって協議を終了することから、事務局でまとめた議論の報告書案を提示。併せて、年間の協議を

通じた総括的な感想等について各委員から発言をいただいた。

ア 事務局より、資料7を用いて説明。

イ 主な意見・質疑応答

・実際に小学生と高齢者が交流する活動を視察した時に、参加された高齢者の方々の笑顔が凄く印象的であった。やはり「楽しさ」というものはキーワードの一つであると思う。地域で見ると、赤ちゃんからお年寄りまで幅広く想定されるので、赤ちゃんと子どもたちとのコラボ、というものも一つあり得ると考えている。0歳児を育てている育休中の保護者の方々も意外と時間があるため、地域子育て支援拠点事業と連携し、「ちあふる」や児童会館に来ている育休中の保護者と赤ちゃんが小学校に訪問して、他の子どもたちと交流しつつ「赤ちゃんて、こんなにかわいいんだよ」と伝えられるような活動があったら楽しいと考えている。

(榊委員)

→推進員の交流会のような場で、一つのアイデアとしてお話しさせていただきたい。(釜石係長)

・社会福祉協議会は、育休中の母親対象の取組を行っているのか。(出口議長)

→どちらかといえば、高齢や障がいといったものが多いと思われる。子育てサロンでは主に乳幼児の保護者支援をしているため、「ちあふる」とつながる可能性はあると考えられる。また、公設ではなく地域の方々が開いた子育てサロンも多くあるので、可能性は沢山あるように感じる。(釜石係長)

→手稲中央小の活動事例のように、連携する相手の組織の存在が大事だと思う。(出口議長)

→以前、子育てサロンを学校にて開催したことがあり、その中に高学年が参観形式で訪れ赤ちゃんの抱っこ体験をしたことがある。子どもたちは恐る恐るという様子で、触っていいのだろうか、この小さい手はどうしたらいいのだろうかという反応であった。小さくて可愛らしい赤ちゃん達を見て、子どもたちが「自分たちもちゃんとしないと」と思えるような活動に向けて、子育てサロン等が連携することもあり得ると思う。

(松岡委員)

・家庭教育や子育ての視点から考えた時に、子育ての孤立化という課題

がとても多いと考えている。学校にうまく適応できない、苦しい思いをしている子どもたちの家庭生活を考えたときに、逆境体験が重なっていることが多い。身体的虐待やネグレクトだけではなく、両親の不仲、分離、別居の体験や、親が長く精神疾患を抱えている場合、依存の問題等、それらを抱えながら育って来る子どもたちを地域で取りこぼさずに社会に送り出すというときに、学校が地域のハブとなることがあり得ると思う。地域学校協働活動を勉強していく中で、逆境体験を経験している子どもたちの保護要件がこの活動に多く含まれていると感じている。逆境体験が重なり社会に出る子どもたちは、精神面・経済面・健康面においても様々なリスクが高いという研究があるが、その影響をなるべく少なくするためには保護要件が重要だと言われている。部活動や地域の人との活動、子ども会活動等、そういった地域の大人が関わる居場所の中での活動で、親以外の大人のロールモデルを目にする、そこに居場所ができるということが、逆境体験からの保護要件になるということも明らかにされているため、そういう視点でもこの活動を進めていただきたい。子どもの育ちという流れから落ちてしまうような子たちをキャッチできる活動になればいいと思う。（今泉委員）

→実際に地域学校協働活動で放課後学習会を行っている中学校の校長先生から、学校に来られず教室に入れないものの、その放課後学習会には来てくれる子がいると聞いている。先生が遠くから見ている中、指導している学生ボランティアと交流できていたり、褒められた時のいい顔を見ることができた、といった話を凄く嬉しそうにお話ししてくださった。我々も、学校訪問や研修等の際に事例を伝え、そのような観点もあることを説明するようにしている。また今年度、学校が地域に説明をしていく中で、民生委員・児童委員の方々が、やはり同じような視点で興味を持ってくださり、児童委員の全体研修や区の支部会にて詳細に教えてほしいというお話をいただく等、関係性もできつつある。（釜石係長）

・地域学校協働活動を通じた地域づくりについて、地域が学校に関わるだけでなく、地域が抱えている問題そのものの解決につながる鍵になるのではないかと感じた。学校と地域と子どもという三角形の中に、仮に企業が参加し四角形となれば、地域課題に対して多様な解決の仕方が生

まれるのではないかと思う。現在、企業は経済的な在り方だけではなく、社会的にも価値をすることで企業価値を高めるという流れがある。この流れの中で地域と企業がより結びつき、協働活動の中に企業が入っていくことでどのような姿となるかが、重要な点であると考えている。既にいくつかの企業は地域へ溶け込む、貢献しようとする姿勢であるが、大半の企業は生産性や利益を重視し地域とはまだ離れているように感じる。この部分をどう結び付けるか、地域に近い存在として位置づけられるかが、地域を強くする鍵になっていくと考えられる。また、地域学校協働活動に関わることで世代間の格差や世代間の意思疎通の難しさが随分変わってくるように思う。SNSの全盛期である現代では、どうしても自分と同じような意見、聞きたい意見しか聞かない、言いたい意見しか言わないという傾向が強くと存在し、それが世代間の分断を促しているように思える。地域学校協働活動を通して、様々な世代間の理解と協力が進んでいけばいいと思っている。世界情勢を始め、現代社会は何かとややネガティブな方向へ向かっていることが厳しい問題であり、やはり地域や企業、学校も含めて試練の場にあるように思う。そのため、社会教育という考えは今一番大事だと考えている。社会から地域を守っていく、地域を社会から良くしていく、あるいは社会を地域から良くしていくといったところが大事なのではないかと感じている。（臼井委員）

→これからの社会の話は重い部分ではあるが、今後子どもたちがずっと曝されていくことを考えると、まずは身近な大人が安心感を与えてあげられるような場となれば良いと考えている。（釜石係長）

・総合的な学習の時間にキャリア教育に取り組む学校が多いが、例えば商工会との連携はできているのだろうか。先ほどの話のように、企業と連携できればより広がっていく話だと思うので、どのように繋げていくかがこれからの課題として挙げられると感じた。

→キャリア教育そのものについては、地域学校協働活動に関係なく学校ではやる必要があるものと認識している。地域学校協働活動を通じ更に協力していただける所となると、双方の都合が生じたり難しい部分も出てくるが、連携できる学校が増えていけば良いと考えている。（釜石係長）

→コミュニティ・スクールの議論の場でこのような話が挙げられた際、委

員が商店等の受け入れ先と繋いでくれるということもあったため、そのようなタイミングでより企業が関われば良いと思う。（出口議長）

(4) 今年度の協議テーマに関する総括的な意見・感想、地域学校協働活動に期待すること

・世代という縦の軸で赤ちゃんから高齢者まで地学協働で関わっていければ良いという話があったが、それに加えて仲間を増やす意味での横の軸という考え方もあると思っている。地域の町内会がキーワードになると考えているが、昨年から役員のお手伝いをさせてもらっている中で、子ども会のような組織と地学協働がより連携していけば、仲間を増やす、横の連携が広がるという点で良いのではないかと感じている。また、企業の視点で言えば、札幌市の案件に入札する際に地域活動のような社会貢献をしていることが有利に働く場合があると思うが、学校との連携や子どもたちへの関わりという点でも考慮されるようになれば、企業も参加しやすいのではないと思う。縦の世代で満遍なく赤ちゃんから御高齢の方まで関わっていくということも当然ながら、横の連携をより広げていき、そこに企業や町内会が入れば、関わる人が一層増えていくように思う。（小野寺委員）

・大事と感じたことを4点ほど述べたい。1点目は地域と学校の関係性について。自身が学校現場にいた当時、地域から見た学校は「敷居が高い。」「頭が固い。」と言われ、一方で学校から地域を見た時には、「お祭りに参加して」「絵を～点出して」と言われ頼み事が多い印象があり、「地域に開かれた学校づくり」という関わり方は少し難しい面があった。これからは地域とともに学校づくりをしていく時代なのだろうと思うが、やはり少子高齢化という難しさがある。町内会活動のようなものに対する担い手が非常に少なく、今までやっていた行事が続々と中止になっていることに加え、学校の学級数も非常に減少しており、地域社会の支え合いの希薄化を感じている。地域と学校が課題解決に向け関係性を深めていくためには、「子どもたちのために」がキーワードになると思う。子どもたちが活動に参加することで、普段は関心のない大人たちも「子どもたちのために」多く参加してくれる。

2点目に、「おらが村の学校」の意識が大事だと思う。東京のある小学校では、外で全校朝会の校歌斉唱を行う際、道行く大人も一緒に歌うよう

な光景が見られた。このような、地域にある学校という意識が学校や地域に必要なのではないかと思う。

3点目に、学校はもっと情報を発信すべきであり、地域もアンテナを張って受け止めるべきだと思う。先生が一人で全てこなすというのは難しい時代であるからこそ、この協働活動を活用してほしい。管理職だけが対応するのではなく、各担当が自分事として意識したときに初めて地域学校協働活動が生き生きと動いてくる。地域に対しヘルプを発信するだけでなく、行った活動の成果も同時にPRしてほしいと思う。

最後に4点目、「もっと学校に大人を」、学校に大人が参加するという視点も非常に大事だと思う。例えば、総合学習の中でロールモデルとしての地域の大人の姿を見せることで、キャリア教育につながっていく。学校では、卒業後の先の生き方を示すというのは非常に難しいため、学校や保護者だけでは対応し切れない部分を、地域の大人たちが見せてほしいと思っている。活動していく中で、子どもにどう育ってほしいか意見を出し合いながら進めてもらいたいと思うと共に、色んな情報を学校や地域へ発信して行ってほしいと思う。（松岡委員）

・地域学校協働活動が活発になっていくと、子どもたちにとっての地元感が凄く深まっていくのではないかと思う。逆境体験にある子たちを見ると、転居して来ているということが凄く多く、地元感が中々得られずに孤立していきやすいというリスクへ繋がっていくことを危惧している。このような課題に対して、地域学校協働活動には学校への通学はもちろん、地域の様々な居場所での活動・体験といった保護要件になり得る可能性が沢山あると感じているため、一層推進していくことが大切だと考えている。（今泉委員）

・11年前に札幌で初めて子ども食堂を立ち上げて以降、小中学校や近隣を回ったが、取り合ってもらえない所があったりと、学校によって違う反応・対応が多くあった。地域学校協働活動を進めていく上で、学校に訪れても話を聞いてもらえないというような、地域が大事にされない状況に対して、この活動がより良く開放されていくようなものになってほしいと切に願っている。これまでの自身の活動の中で、地域に居場所を見つけられず出歩く子どもたちを多く見かけてきたが、その居場所や頼れる大人が見つかることで、子どもたちの選択肢は凄く増えていくように感じる。そう

いった、子どもたちが地域と繋がるきっかけとなるように、学校がハブとして活躍して行ってほしいと思う。（安田委員）

・子どもたちの時間は縛られている現状があると思う。学校はもちろん行かなければならないものであるが、それに加えて塾や部活、そういった身近なところだけで色々なことが回ってしまうと、長期的な視点あるいは広い視野のようなものが欠如して行ってしまおうと思う。そういった意味では、この地域学校協働活動で色々な地域の人たちと触れ合ったり、大人たちと出会ったりすることで、学校のテストのことばかりではなく地域社会という世界や大人に対する視野を得られるため、子どもたちには非常に収穫があるように思う。また、やはり良識ある企業をこの地域学校協働活動に何とか加えられないかと思っている。企業と触れ合うことで、どんな人たちがいるのか、どういう働き方をしているかという部分は感じられるほか、企業は融通が利いたりもするため、様々な支援も恐らくできるのではないかと考えている。学校は、地域の宝のようなところであって、人々が集ったり、情報を得たり触れ合う場となっていくことは大変大事だと思う。（臼井委員）

・まず、子どもにとって学校がホッとできる場、楽しい場であってほしいと思う。またこの活動が、そういうホッとできるような、楽しかったと思える時間を提供できることを望んでいる。そのためには、地域の信頼できる大人、子どもたちが素敵と頼れる大人と出会ってほしいと思っている。子どもも大人も、心が解けるからこそ繋がり合えると思うので、その心が解けるような場所、時間になっていけばいいと思う。（榊委員）

・先程発言のあった、身近な人の安心感というものが大事だと思っている。昨今の社会の中では、普通に学校へ通い仕事をしていくという流れをそのまま生きられる子どもたちもいれば、それが叶わない子どもたちもいる。様々な背景を持つ家庭がある中で大人が何をできるのかと考えた時、繋がり続ける力が大事だと考え、日頃学生達にも伝えている。そう考えると地域学校協働活動は、大人との繋がりや横での繋がりを作るトレーニングを積み重ねていく場ではないかと思っている。教育というものは、成果が出るかどうか分からないものではあるが、その中で種を撒き続けることが大事で、社会教育の行政は、暗中模索の中を行かざるを得ないものだと思う。ただ、社会教育は学校教育と違って、強制してはいけない。種をま

くことが社会教育法の根源であり、自身も札幌市が行っていることを大学教員としてもっと伝えていかなければいけないと思うほか、形として見えないところもあり、理解を得られないところも出てくると思うが、教育に投資してよかったと思う人が社会教育の文脈でも出てくるよう、その一翼を担うべく、もう少し自分も謙虚に頑張らなければいけないと思った。

(片岡副議長)

・3つほどお話させていただきたい。1点目、地域学校協働活動の基となる学校支援本部事業が文科省で2008年にスタートする前、中教審の答申では「知の循環」という言葉が使用された。これは、公民館等で学んだ成果を地域のボランティア活動等に生かし、活動の中で新たな課題が見つければ、また公民館等に行き学ぶ、この繰り返しのことを示している。本事業によりこの循環が広がっていく、社会教育がより元気になっていくと考えていたが、実際のところは、地域の方が今できることを学校支援ボランティアとして取り組むというようにところに留まり、知の循環に中々繋がっていないように感じている。札幌市では「ちえりあ」や各区のコミュニティセンター等で様々な講座が行われているため、そこで学んだ成果を地域学校協働活動に生かすというような流れの下、学校のニーズを新たに聞きつつ「ちえりあ」やコミセンが新たな講座をやるような、そのような流れで循環というものが実現できないだろうか。学ぶ場やそれを生かす場がもっと必要だと思うので、それらが相乗効果として上手くいくような取組に発展していければいいと思っている。

2点目、コミュニティ・スクールとの関係性について、自身は文科省のCSマイスターとして、今年度トータル10回ほど各学校区に出向いて説明を行わせていただいた。校長先生に話を聞くと、コミュニティ・スクールは初年度、1学期の報告を学校から聞き委員が意見を言う回、2学期、3学期も同様で、4回目は翌年度の基本方針の承認、この4回からスタートするのが大体のパターンであるとの話であった。しかし、このようなやり方では学校評議員制度と何も変わらないため、4回では足りないと考えている。もっと実際の子どもたちの地域課題・教育目標を皆で共有した上で、その課題を解決するために学校区で何をやるかということ話し合うのがコミュニティ・スクールの役割であり、それを実現するのが地域学校協働活動であるという説明を行っている。その話を聞いてなお、やっぱり

来年度4回からスタートという校長も多いため、難しさを感じているところ。指導主事の皆様方には、各学校区のコミュニティ・スクールの伴走支援がとても大事、学校評議員より発展させなければいけない、という話を説明するとともに、同じ内容を指導主事の皆様から学校に対して説明してほしいと熱く伝えている。最終的には意見を言う場ではなく、子どもたちのために何をするか、それを地域学校協働活動にどうつなげていくのかということがとても大事なのだらうと思っている。伴走支援を行う指導主事の方々には、必ずこの協働本部に繋げていくような取組に発展させていただきたいと伝えている。最終的にコミュニティ・スクールが目指すのは、地域学校協働活動の実現ということなのだろうと思っている。

3点目、大学との連携について、自身も課題解決に関する授業を大学で行っているが、その中で学生の経験の違いを凄く感じる。それは総合的な学習の時間、探究の時間がきちんと行われる学校で育ったかどうかに関係してくるものだと考えている。しっかり経験している学生たちは、課題をこちらから伝えたと、どんどん奥深く調べていき、発表も堂々と原稿なしでこなしている。しかし経験のない学生たちは、どうやって調べればいいのかというところからスタートしており、学生の経験に凄く温度差があると思っている。その充実のためにも、地域の方々に御協力いただきながら、小中高の総合的な学習の時間、探究の時間をより良いものにしていく必要があると感じている。経験してこなかった学生たちも、大学で学校支援ボランティア活動をやることによって、新たに経験できるのではないかと思う。この会議には私を入れて3人の大学関係者がいるが、市内にはもっと大学があるため、それら大学との連携ということをぜひ果たしていただきたい。もちろん授業の中で行うのは大変だらうけれども、学校支援ボランティアとしてこんなことができるということを、もっと大学の教員に伝えていただき、それを学生たちが取り組みやすい環境をどうやって作っていくのかと考え、整備することによって、多くの学生が地域学校協働活動に参加する機会が生まれるのだと思う。またこういったことが、いわゆる世代間の取組の一つにも繋がっていくと思う。

コミュニティ・スクールや地域学校協働活動を通して、地域を愛する子どもを育てるためには、多くの大人が関わっていく必要があると思う。その中で色々な気づきがあり、それが形となり、この地域を何とかしなければ

ば、と繋がっていくことが持続可能な地域づくりにも繋がっていくと思うので、ふるさとを愛する子どもを育てることができるのは、私は教育だけだろうと思う。その有効な手段として地域学校協働活動があると思うので、札幌市の発展をもっと願うのであれば、地域を知った子どもたちを育てていくということが大事なだろうと感じている。（出口議長）

※欠席の小田島委員及び高原委員については、別途御意見をいただく。

#### （４）連絡事項

今回提示した報告書案については、出口議長から御助言をいただきながら事務局にて作成を進め、最終的に社会教育委員の皆様へ再度メールにて内容を御確認いただきたい旨依頼。完成した報告書については、教育長への手交式を行うため、開催に関し後日改めて御連絡する旨伝達。

#### （５）井上部長から挨拶、出口議長からご挨拶

今期最後の会議であるため、事務局を代表し井上生涯学習部長より挨拶。また、同様に社会教育委員を代表し、出口議長よりご挨拶をいただいた。